

企業業績尺度と営業サイクルとの関係

追手門学院大学 浅野信博

わが国の製造業に属する企業は、オイルショック、バブル崩壊、国際化、IT革命など、様々な局面を乗り越えて今日に至っている。こうした中、投資を研究開発に特化し自社の工場を持たないファブレス企業や、製造業にもかかわらずほとんど労務費（賃金）が発生しないようなハイテク工場をもつ企業がわが国においても目立つようになり、‘企業の姿’をこれまでのように一律に捉えることが困難になってきている。

近年、キャッシュフロー会計の重要性がことさら強調され、あたかもすべての企業が会計利益を放棄しキャッシュフローやEVATM中心の企業経営を行わなければ、企業の存続が危ういような論調すら垣間見える。しかしながら、企業の成長過程や業種、業態において、それぞれ望ましい企業業績尺度は異なるはずであり、これについて‘企業の姿’をかえりみることなく一律に論じるならば、適切な意思決定を損なうことになり、ともすれば社会的な最適資源配分を損なう恐れすら否めない。

企業が成長するにともない、営業サイクルや取引サイクルは変化する。財務会計の立場からは一般に、このサイクルが長ければ長いほど、キャッシュフローを企業業績尺度としてそのまま用いることの問題点が指摘される。他方、管理会計の視点からは、企業成長の段階の如何にかかわらず、（会計利益はともかく）キャッシュフローやEVATMの業績尺度としての重要性が財務会計よりも早くから強調されてきた。

本報告では、財務会計および管理会計の視点から、望ましい企業業績尺度が企業のおかれた状況によって異なるのかどうか考察する。具体的には、企業の成長にともなって変化する営業サイクルや取引サイクルが、代表的な企業業績尺度である会計利益とキャッシュフローに対して具体的にどのような影響を及ぼすのか、ひいては企業の様々な成長局面において会計利益とキャッシュフローのいずれが企業業績尺度としてふさわしいのかについて、製造原価報告書を含めた財務データを用いて明らかにする。

EVATMは、スタン・スチュワート社の登録商標である。

